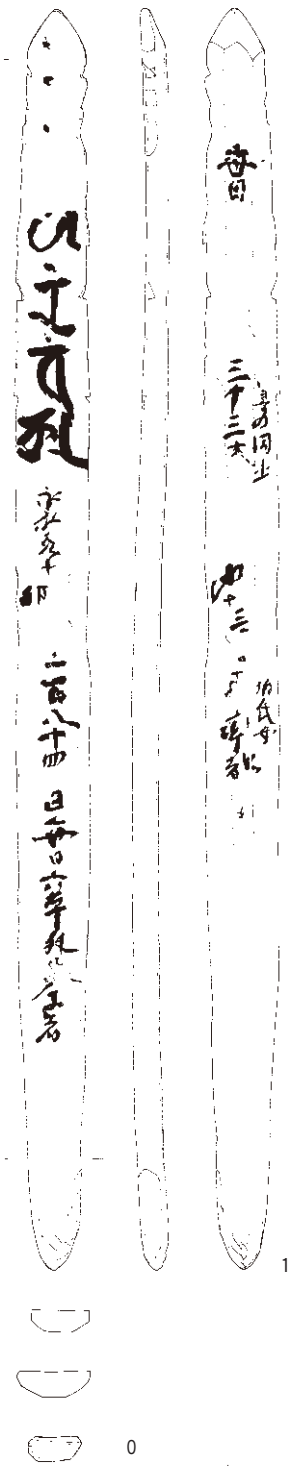
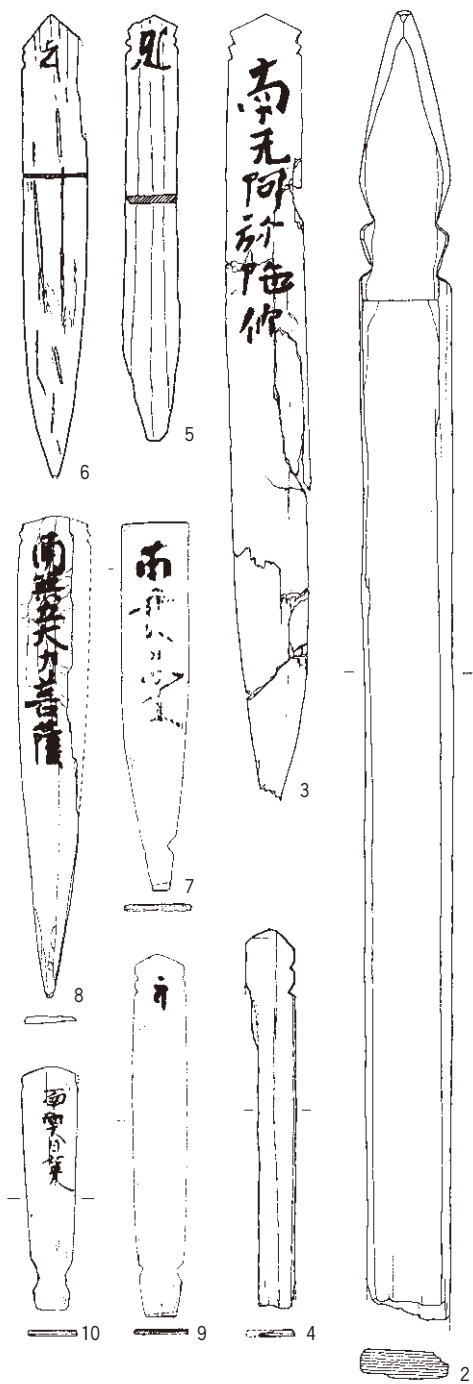


豊穂遺跡出土卒都婆



県内出土卒都婆



- |            |              |
|------------|--------------|
| 2 小島西遺跡    | 5・6 三木だいもん遺跡 |
| 3 南吉田葛山遺跡  | 7～10 堅田B遺跡   |
| 4 水白モンシヨ遺跡 |              |

第2図 卒都婆実測図 (S=1/4)

### 三、卒都婆の位置付け

中世の木製卒都婆の出土は本遺跡の他に県内六遺跡で確認されている。

そのうち、珠洲市野々江本江寺遺跡出土の木製笠塔婆と木製板碑が一九〇センチを超える大型の特殊品であるのを除くと、小島西遺跡出土品と南吉田葛山遺跡出土品が四〇センチ以上となる以外は三〇センチ以下の小型の笠塔婆である。頭部山形で左右に二段の切り込みを持ち、下端を失わせるものが多い。

墨書は六字名号、大日如来の種子、「南無大日如来」などがあり、紀年銘を記したものはない。堅田B遺跡出土品は二七点が報告されており、一部の笠塔婆は共伴する建長三年（一二五二）銘を持つ巻数板に「一、奉造立大日□□率都婆廿五本」との記載があることから、巻数板吊りの一連の行事に関連したものと推定され、時期と具体的な使用目的が知られる貴重な例となっている。これらは時代の特定できない南吉田葛山遺跡を除き、十一世紀末～十四世紀前半代の資料である。

厚さ一ミリの前後の薄板状のこけら経は、県内では発掘調査で出土したもの二例、不時発見のもの三例、伝世品一例が知られる。そのうち、金沢市普正寺遺跡出土例は十五世紀中頃の所産、能美市湯屋出土経はその手法が十六世紀代の遺品に共通するとされ、十五世紀代の所産とみられる昨年発見の白山市宮保館跡出土例を合わせ、十五～十六世紀代に片面書写のこけら経が確認される。一方、金沢市栗崎出土経は両面書写で、その法量や作工から十四世紀後半～十五世紀前半の所産と推定されており、本卒都婆が造立された頃に県内で両面書写のこけら経による積善の行為が実際に行われていた証左と言える。

また、同じ永和年間の紀年銘資料として挙げられるのが七尾市中島町町屋に所在する石碑である。中央に「南無阿弥陀佛」、右に「永和三五月十五日佛心」、左に「日課六万遍念佛」と彫られたものであり、主尊や方法は違えども、毎日作善を積んで功德を得ることを目的とした点で共通する。材質は異なるが、短い永和年間の紀年銘資料が能登に続いて加賀でも

確認されたことは、当時様々な積善の営みが県内で盛んに行われていたことを裏付けるものでもある。

本遺跡出土の卒都婆は、他の出土事例に比べると年代がやや新しいが、頭部五輪塔形のものとしては県内初例であり、永和元年（一三七五）銘を記す点で貴重である。造立目的がこけら経写経供養に関連することが明らかにされた点においても稀少と言える。目的とした供養が、追善か逆修かは不明ながら、満願を祈念して、或いは満願の証として造立されたのである。何千枚ものこけら経の書写には、栗崎出土経に関して戸淵幹夫が指摘するように（戸淵一九九二）、相当の経済力が必要であったとみられること、供養或いは年中行事を執り行い、木製卒都婆を造立できたのは、県内の出土遺跡の様相から在地領主クラスであったことが想定されることから、本卒都婆についてもそうした有力者が関わっていると推定しておきたい。

本卒都婆は報告書刊行後、八年を経てようやく正しい評価がなされ、調査担当者として長年の胸のつかえがとれた想いである。末筆ではありますが、このたび釈読にあたり御尽力いただき、原稿執筆を御快諾下さった藤澤典彦氏、諸々の御協力・御指導をいただいた狭川真一氏に深謝いたします。（岩瀬由美）

#### 参考文献

- 石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター 二〇〇二 『金沢市豊穂遺跡』
- 金沢市 二〇〇四 『金沢市文化財紀要二二三 堅田B遺跡』
- （財）石川県埋蔵文化財センター 二〇〇九 『宮保館跡・宮保B遺跡現地説明会資料』
- 戸淵幹夫 一九九二 「加賀出土のこけら経」『石川県立歴史博物館紀要5』石川県立博物館
- 三浦純夫 一九九六 「第二章第二節 板碑の立つ風景」『中島町史 通史編』

元年は丁卯に当たる。「丁」はほとんど見えないが、「卯」は確認できる。その下には数字が記されており、「二百八十四日毎日六本能写者」となる。「四」と「日」の間隔が少しあり、そこを「ケ日」と繋ぐために「ケ」「箇」などが入る可能性もあるが、痕跡は見られない。「本」は「大」＋「十」の組み合わせで書かれている。「本」を「十八十」と見ることも可能かも知れないが、文字間隔が不自然になるので「本」と見ておきたい。その下は「能写者」と読んだが、それは「能・者」は一つの定型文であるからである。要するに「二百八十四日毎日六本能写者」は二八四日の間毎日六本の卒都婆を書いたことになる。二八四日×六本で一七〇四本の大量の卒都婆になること、さらに「写」とあることから、これは卒都婆経（こけら経）の営みがおこなわれた事を示すものと考えてよい。こけら経写経という事になれば、普通には書写経典は法華経が考えられるが、法華経の普通の配字で行くと四一〇〇弱の行数になる。それでは卒都婆の数が少なく、法華経の可能性は少なくなるが、こけら経の両面写経はこの時期では普通に見られるところであり、一七〇四×二＝三四〇八としてもまだ少ない。ところが「二百八十四」が「三百八十四」の可能性もあり、そうすると三八四×六×二＝四六〇八となり、法華経と一緒に写されることが多い開結二経・阿弥陀経などを含めると丁度良い数になる。「三百八十四」の可能性も残しておきたい。

背面は表面より狭い平坦面と斜めにカットしてある両側面とからなる。背面はかなり表面の荒れが強く、木目が浮き出ているが、付着物に覆われていたために墨書が良く残っている部分が三カ所ある。背面中央部には、大きな文字が配され、側面には、小さい文字が配される。

先端部は墨書はあるが、読めない。最初の墨書の良く残る部分は「毎日」または「毎月」のいずれかであろう。供養の内容がそこに書かれていたと考えられる。右側面部の最上部は「為」の可能性がありそうである。

二番目の墨書の残る部分は「三十三□」が明瞭だが、「□」部分は上部

だけ残っており「本」の可能性があるが確定はできない。「本」とすると卒都婆の数に関係するものと考えられる。この側面部は「兼為同□」と読める。先の「為」に続いて為が連続するので、この部分には被供養者が書かれていたと考える事ができる。「□」の上が「同」であるので被供養者で同□となるのは同朋・同縁・同族などのグループを示すものと考えられるが、不明である。「三十三本」とするなら、この数の卒都婆が同□の為の造立であることを示すことになる。それ以外に、卒都婆で「三十三」の数字と関係する場合として三十三回忌供養なども考えられるので、その点も考慮しておく必要がある。

次は「□□□卒都婆」だが「御」は少々不明確。次の「卒都」は間違いない。次の「婆」は不明確であるが、「婆」の下に「女」らしき痕跡はかすかにわかるので、「婆」としておく。その側面部には「為氏女」とある。氏女の表現は文献などに「〇〇氏女」と女性の個人名を出さず、出身氏名を示す方法としてよく見られるところで問題はない。

以上、読める文字について検討したが、裏面は表面で述べている営みが誰の為のものであるかを具体的に示していると考えてよい。ここで注目すべきは「為」が複数回出てくる事である。すなわちこの営みは個人の為のものでなく、複数グループ・あるいは一集団内の様々な人々の為のものである。

この卒都婆はこけら経写経供養が多数の人々・グループの人々によって（為に）おこなわれた際に造られたものと考えられる。こけら経は書写された後、タガで絞められどこかに奉納されるか、水辺で流されるかしたことが多く、そのことはこけら経の残存・出土状況からも窺える事である。本卒都婆はそれらのこけら経に添えられたものと考えてよいだろう。まったくの想像だが、こけら経の束の中央に立てられていたような状況が考えられる。豊穂遺跡の状況から、行事の最後に水辺で流されたものであろう。こけら経写経のあり方を示す貴重な資料と言える。

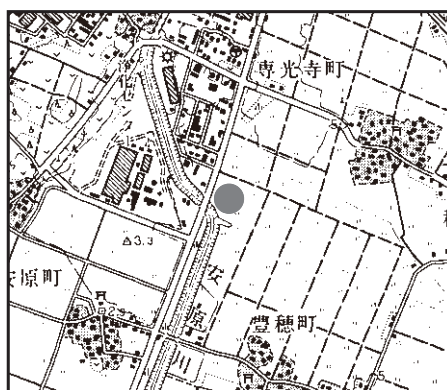
（藤澤典彦）

# 石川県金沢市豊穂遺跡出土の木製卒都婆について

藤澤 典彦(大阪大谷大学)  
岩瀬 由美(特定事業調査グループ)

## 一、遺跡の概要

金沢市豊穂遺跡は金沢市西部の安原川下流右岸に位置する。約七〇〇㍍西方に広がる安原海岸砂丘背後の標高約二・五㍍の低湿地に立地し、伏流水に恵まれた土地である。平成十一～十二(一九九九～二〇〇〇)年度に現地調査が行われ、古代から中世にかけての遺構が検出された。古代においては九世紀前葉～中葉を中心とし、「大伴庄」の墨書土器が確認されたことから初期荘園関連遺跡の一角と推定される。中世においては前半(十三～十四世紀)、及び後半(十五～十六世紀)の二時期の遺構が確認され、前半期においては井戸跡や区画溝とみられる遺構が確認されていることから、集落の一部を調査したものと判断される。後半期は溝遺構を確認したに留まるが、その年代から、本遺跡北東部に比定されている浄土真宗寺院、吉藤専光寺跡との関連が想定されている。



第1図 遺跡位置図 (S=1/25,000)

これらの調査成果は平成十四(二〇〇二)年度に発掘調査報告書として刊行されたが、その中で報告したSD31出土の木製卒都婆(第2図1)について、その後に保存処理が行われた結果、処理前よりも墨痕が鮮明となり、釈文の修正が必要になったこと、かつ、裏面にも墨書がなされている

ことが新たに判明したため、大阪大谷大学の藤澤典彦氏に釈読をお願いし、ここに改めて報告するものである。(岩瀬由美)

## 二、出土卒都婆について

卒都婆は長さ六六・八センチ、幅三・九センチ、厚一・五センチを計る(報告書記載数値)。上部は五輪塔形を刻み、下端部は各面からの削りが入り先端を尖らせており、おそらく挿し立てて使用されたと考えられる。表面は平坦だが、背面の平坦部は幅が狭く、背面左右角(両側面)は斜めに大きく面取りされている。

各輪の刻み目は余り明瞭ではない。卒都婆は新しくなると、空・風輪幅が地輪幅に近づいてくる傾向がある。要するに左右からの彫り込みが省略されるようになるのである。本卒都婆は空・風輪が全体幅より狭く削り込まれており、古い卒都婆である事は明瞭である。

また、空輪の形はやや細めであり、先端の尖りは左右の内彎するカーブが自然に交差して形成されており、先端を無理に尖らせたところが無く、この点も古いタイプの五輪塔に通じる。

墨書は読めないところも多いが、一応以下のように読んだ。

### 【表面】

□・□・ラン・バン・ア 永和元年 二百八十四 日毎日六本能写者

卯

### 【裏面】

為□・・ 兼為同□ 為氏女

毎日(月) 三十三□ □□御卒都婆

梵字部分は「ア」に空点が無く、キャ・カ・ラ・バ・アの四門展開の菩提門ではなく大日法身真言と考えられる。その下は年号で「永和元年」とあり、西暦一三七五年に当たる。その下に左右に割って干支がある。永和